

後期・邪馬台国の時代⑥

～出雲の神々～

河村哲夫

高天原に関する作為説・天上説・地上説

「高天原」については、江戸時代においても基本的な認識の差があった。

大きく分けると、(1)作為説(2)天上説(3)地上説である。

(1)作為説

江戸時代の大坂商人・山片蟠桃(1748～1821)が『夢の代』のなかで唱えた説である。

虚構・おとぎ話・空想とする説である。

応神天皇以前の『日本書紀』の記事について懐疑的な立場を取り、とりわけ神代篇の記事は、「論ぜずして可なり」と切り捨てる。

その影響を受けたと思われる早稲田大学の津田左右吉(1873～1961)の著作が昭和 15 年(1940)に発売禁止の処分をうけ、彼自身出版法違反で起訴されたが、終戦後、天皇の絶対的権威と戦前・戦中の歴史教育のいっさいが否定される時代が到来すると、津田左右吉は英雄のごとくよみがえり、彼の説は戦後史学の主流となった。

日本の古代神話は、大和朝廷の役人たちが机上で作りあげた虚構とされ、『古事記』『日本書紀』は教科書から追放されてしまった。

高天原を含め、記紀神代篇の内容を虚構とみる説は、戦後教育を受けた人々のいわば常識となっている。

(2)天上説

本居宣長(1730～1725)が唱えた説である。

バイブルとして、書かれたとおりに信ぜよ、とする説である。

高天原も、その字義のとおり、神々が住む天上界のことであり、地上と解するのは、偏狭な「私(わたくし)ごと」に基づく解釈である。

疑うことが学問のスタートであるとするれば、これはほとんど宗教である。

彼は、漢文で記された『日本書紀』を忌み嫌い、日本語の音を表す万葉仮名で記された『古事記』を偏愛した。

この本居宣長によって基礎づけられた国学は、江戸後期の平田篤胤によって、さらに純化され、幕末における尊王攘夷家の思想的基盤となるとともに、明治以降の皇国史観の理論的支柱となった。

(3)地上説

「神は人である」と説く新井白石(1657～1725)流の説である。

新井白石は、江戸時代を代表する知識人である。旗本の家生まれ、朱子学者であり、6 代将軍徳川家宣に侍講として仕えるなど、幕政に大きな影響を与えた能吏であり、博学の人であった。

彼の関心の分野は、歴史学・地理学・言語学・文学と多岐にわたり、多くの漢詩も残した。

日本古代史についても関心が深く、『古史通(こしつう)』【1716(享保元)】という著作のなかで、「神は人なり」と説き、高天原について地上の常陸国とする見解を示した。

作為説と天上説の絶対性

ところで、(1)作為説と(2)天上説は一見すると真反対の説のようであるが、意外な共通点を有している。

(1)作為説は「絶対に存在しない」とし、(2)天上説は「絶対に信じる」とする「絶対性」である。

「絶対に信じない」というニヒリズムの世界と、「絶対に信じる」という宗教の世界に共通するのは、絶対に地上の話ではないということである。ところが、歴史というものは、この地上の話である。

(1)作為説と(2)天上説は、『古事記』『日本書紀』の歴史性を排斥するという点で共通点を有している。

下図は、安本美典氏の『邪馬台国と高天の原伝承』(勉誠出版)に掲載されたものである。

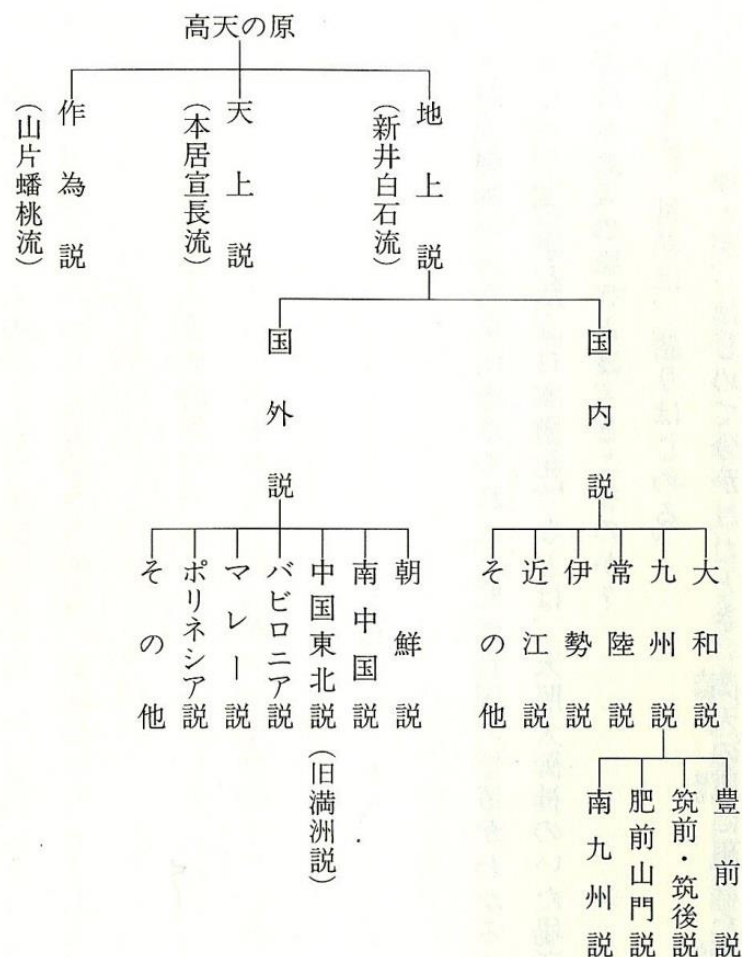


図9 「高天の原」についての諸説

この図を見て、何かお気づきにならないか。地上説のうちの国内説である。

大和説と九州説の乱立状況——まるで、現代の邪馬台国論争のようではないか。

戦前においては、邪馬台国論争よりも、高天原論争や高千穂論争などの方がはるかに熱心に議論されていた。

しかしながら、終戦と同時にバクッと消え去り、代わって邪馬台国論争が表舞台に躍り出て現在に至っている。

そして、『古事記』『日本書紀』をあえて(2)の天上説で解釈したうえで、(1)の作為説でもって地上から抹殺する手法が横行している。

高天原のみならず、神々についても、同様の手法で、この地上から追放する。

もはや歴史とは無関係の、おとぎ話の世界、文学の世界であり、

「古事記は日本最古の文学作品なり」

と、唱えることが定番となった。

神について

『古事記』『日本書紀』が、「神」という漢字を使ったことにも起因している。

ご承知のとおり、「God＝神」と翻訳されている。西欧の God は、宇宙の絶対的な存在であり、哲学・神学の根本的概念である。

平田篤胤(1776～1843)も、この西欧流の絶対的な存在としての神の概念をすでに知っていたといわれる。

そして、明治維新後、現在に至るまで、地球上におけるさまざまな民族の超越的存在としての信仰対象を、漢字で「神」と翻訳することが定着し、そのことに引きずられるように、『古事記』『日本書紀』の神々についても、超越的存在のごとき解釈——つまり天上説が主流となり、そして作為説でもって、この地上から追放するのが常識となってしまった。

『日本書紀』神代紀の冒頭に、次のように記されている。

「至りて、貴(とう)きをば、尊(そん)という。自余(これよりあまり・その他)を命(めい)といふ。並(ならび)に美孁等(みこと)という。下(しも・以下)此(これ)に効(なら)え」

つまり、

「尊称として『尊』を使い、その他に『命』を使う。両者とも『みこと』という。以下おなじ」という意味である。

ところが、戦後史観を代表する『日本書紀』(岩波書店)の補注は、

「神は、原則として宗教的対象に対して用い、その他の場合はミコトの語を用いる」と記す。

これは日本の神々に対して、西欧流の超越的存在としての「神(God)」の概念をかぶせて、歴史の世界から追放しようとする試みにほかならない。

神もまた尊や命とおなじく、単なる尊称に過ぎず、序列からいえば【①神—②尊—③命】である。

尊称が付されるのは、もちろん人間である。

神(カミ)・尊(ミコト)・命(ミコト)に区分して整理すると、下表のとおりとなる。

神(カミ)・尊(ミコト)・命(ミコト)の使用状況

名	神(カミ)	尊(ミコト)	命(ミコト)	貴(ムチ)
天御中主	天御中主神	天御中主尊		
天照大神	天照大神・天照大御神・大日靈貴神・天照皇大神・天照皇太神・皇大御神・天照坐皇大御神	大日女尊(おおひるめのみこと)		大日靈貴(おおひるめのむち)
月読命		月読尊・月弓尊・月夜見尊・月讀尊	月読命	
スサノオ		素戔男尊・素戔鳴尊・須佐乃袁尊	建速須佐之男命・速須佐之男命・須佐之男命・神須佐能袁命・須佐能乎命	
イザナギ	伊邪那岐神・伊弉諾神	伊弉諾尊	伊邪那岐命	
イザナミ	黄泉津大神・道敷大神・伊邪那美神		伊邪那美命・伊弉冉命・伊邪那美命・伊弉弥命・伊弉那彌命	
タカミムスビ	高御産巢日神・高木神・高木大神	高皇産靈尊・高御魂尊	神王高御魂命・高魂命・天照高彌牟須比命・高御牟須比乃命	
イチキシマヒメ			市杵島姫命・市杵嶋姫命・市寸島比売命・市岐嶋毘賣姫・中津島姫命・狭依毘賣命	道主貴(ちぬしのむち)
オオクニヌシ	大国主神・大国主大神・大穴牟遲神・八千矛神・大物主神・宇都志国玉神・大国魂神・伊和大神・所造天下大神・地津主大己貴神・国作大己貴神・幽世大神・幽冥主宰大神・杵築大神		国作大己貴命	於保奈牟知・大穴道・大汝・大己貴(オオナムチ)
アメノオシホミ		正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊・正哉吾勝勝速日天忍骨	正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命・天之忍穗耳命・天忍穗耳命・忍骨命・吾勝命	

		尊・正哉吾勝勝速 天穗別尊・天忍穗 根尊		
万幡豊秋津師 比売命			栲幡千千姫命・万幡豊秋 津師比売命・栲幡千千媛 万媛命・天万栲幡媛命・栲 幡千幡姫命・火之戸幡姫 児千千姫命	豊日雲
ニニギノミコト		天津彦彦火瓊瓊杵 尊・天津彦国光彦 火瓊瓊杵尊・天津 彦根火瓊瓊杵尊・ 火瓊瓊杵尊・天之 杵火火置瀬尊・天 饒石国饒石天津彦 火瓊瓊杵尊	天杵瀬命・天邇岐志国邇 岐志天津日高日子番能邇 邇芸命・天津日高日子番 能邇邇芸命・天津日子番 能邇邇芸命・日子番能邇 邇芸命	
山幸彦		火折尊・火折彦火 火出見尊・彦火火 出見尊	火遠理命・天津日高日子 穗穗手見命	
ヤマトタケル		小碓尊・日本武尊・ 倭建尊	小碓命・倭建命・日本武 命・倭健天皇命	

神という尊称が付されているのは、天御中主・天照大神・イザナギ・イザナミ・タカミムスビ・大国主などである。

下記の天御中主命からイザナギに至る神々の系譜——おそらく奴国の系譜——については、第一部の「奴国の時代」のなかで詳しく論じたとおりである。

【古事記】

神名	
別 天 つ 神	1 天御中主神
	2 高御産日神
	3 神産巢日神
	4 宇摩志阿斯訶備比古遲神
	5 天常立神
	1 国常立神
	2 豊雲野神

神 世 七 代	3	宇比地邇神・妹湏比智邇神
	4	角杵神・妹活杵神
	5	意富斗能地神・妹大斗乃弁神
	6	於母陀流神・妹阿夜訶志泥神
	7	伊耶那岐神(イザナギ)・妹耶那美神(イザナミ)
天照大神		

【先代旧事本紀】

神 名			
神世七代		別天つ神	
1	天御中主尊(天常立神)・可美葦牙彦舅尊		
2	国常立尊・豊国主尊	1	天八下尊(浮経野豊買尊・豊鬻別尊)
3	角杵尊・妹活杵尊	2	天三降尊
4	渥土煮尊・妹沙土煮尊	3	天合尊(天鏡尊)
5	大苦彦尊・妹大苦辺尊	4	天八百日尊
6	青櫃城根尊・妹吾屋惶城根尊	5	天八十万魂尊
7	伊弉諾尊(イザナギ)・妹伊弉冉尊(イザナミ)	6	高皇産靈尊(高魂神・高木命)
天照大神			

『古事記』の「神」が、『先代旧事本紀』では「尊」とされている。

やはり、「神」と「尊」の間には、互換性がある。

それはともかく、「神(カミ)・尊(ミコト)・命(ミコト)の使用状況」をみると、いずれも高天原(筑紫)と出雲の支配者の系譜であり、高天原(筑紫)においては、

【イザナギ→天照大神→タカミムスビ(万幡豊秋津師比売命の父)】

と継承され、出雲においては、

【イザナミ→大国主】

と、どういわけか、スサノオを省いて神の称号が継承されている。

神(カミ)という尊称は、おそらく、酋長や王あるいは一族のリーダーを意味する東アジアの【汗(干・カン)——干岐(カンギ)】およびアイヌの【カムイ】などと同系語なのであろう。

なお、白川静氏の『字訓』には、言語学的な見地から、

「ミは乙類、従って甲類の上(かみ)や髪(かみ)とは異なる語である。アイヌのカムイという音が、いわゆる乙音類に近いものであろう」

とされている。ミコトについても、

「みこと(命)は『御言(みこと)』の意。『み』は接頭語。またその人を尊んでいうとき、命(みこと)・尊(みこと)をその名の下にそえていうことがあり、その場合は『御事(みこと)』の意で婉曲語法」

と書かれている。

「貴(ムチ)」もまた尊称の一つであろう。ただし、天照大神・宗像三女神・大国主命など、ごく限られた者しか付されていないことから、一般化せず限定的に用いられた称号かもしれない。あるいは、出雲発の独自の称号であった可能性もあり得よう。

いずれにしても、尊(ミコト)と命(ミコト)について、『日本書紀』は尊(ミコト)が主で、命(ミコト)が従(その他)のように記しているが、同一人物に対して併用している例がかなりみられることから、厳格に区分されたとはおもえない。神と尊、神と命の間で、わりと弾力的に互換されている。

やはり、新井白石が指摘したように、「神は人であり、人の尊称が神である」。

「カミ」といおうが「ミコト」といおうが、尊称という点で変わりはないということになる。

宗教色が一掃されるという意味においては、戦国武将の「守(カミ)」のようなものとして理解した方が簡明であるかもしれない。

天上界の神(God)でもなく、おとぎ話の桃太郎でもない。

ということで、「神は人である」という新井白石流の基本スタンスに立って、以下、出雲の神々について述べることにしたい。

出雲の神々

神(カミ)という尊称は、

「酋長や王あるいは一族のリーダーを意味する東アジアの【汗(干・カン)——干岐(カンギ)】およびアイヌの【カムイ】などと同系語なのではあるまいか」

と述べたが、イザナギとイザナミから生まれた神々は、それとは性格が異なるようである。

村の大工さん、屋根葺きさん、左官さんなどの責任者あるいは頭(かしら)のようなイメージである。筆者も農村で生まれ育ったが、村の中には、

【大工さん、屋根葺きさん、左官さんのほか、鍛冶屋さん、石屋さん、金物屋さん、傘屋さん、建具屋さん、棺桶屋さん、自転車屋さん、馬車引きさん、縄屋さん、筵屋さん、散髪屋さん、靴屋さん、お医者さん、産婆さん、駄菓子屋さん、酒屋さん、油屋さん、豆腐屋さん、魚屋さん、瓦屋さん、反物屋さん、染め物屋さん、薬屋さん、床屋さん、茶碗屋さん、神主さん、お坊さん】

など、ほとんどすべての職業が揃っていた。

村内にない場合でも、近隣の村には確実にあった。

家を普請したり、藁屋根を葺き替えたり、道路や水路を掃除するときなどは、大勢の村人が集まって行われた。

無人島に漂着しても生き延びることができたであろう。

現在では、ほとんど見ることのできない絶滅した風景である。

そういう観点から、イザナギとイザナミから生まれた神々をご覧いただきたい。

(1)イザナギとイザナミから生まれた十柱の神——住居と港・航海の安全

『古事記』	『先代旧事本紀』	備 考
大事忍男神(おおごとおしお)	大事忍男神	・仕事全体を統括する神
岩土毘古神(いわつちびこ)	石土毘古神	・石と壁土の神
石巢比売神(いわすひめ)	石巢姫神	・砂の神
大戸日別神(おおとひわけ)	大戸日別神	・門戸の神
天之吹男神(あめのふきお)	天吹男神	・屋根の神
大屋毘古神(おおやびこ)	大屋比古神	・住居の神
風木津別之忍男神(かぜもくつわけのおしお)	風木津別忍男神	・暴風を防ぐ神
大綿津見神(おおわたつみ)	大綿津見神	・海を守る神
速秋津彦神(はやあきつひこ)	水戸神(速秋津彦神)	・川を守る神
速秋津比売神(はやあきつひめ)	妹速秋津姫神	・川を守る神

(2)水戸神(速秋津彦神)と妹速秋津姫神から生まれた八柱の神——治水と用水の確保

『古事記』	『先代旧事本紀』	備 考
沫那芸神(あわなぎ)	沫那芸神	・泡の神
沫那美神(あわなみ)	沫那美神	・波の神
頬那芸神(つらなぎ)	頬那芸神	・泡の神
頬那美神(つらなみ)	頬那美神	・泡の神
天之水分神(あめのみくまり)	天水分神	・雨水の神
国之水分神(くにのみくまり)	国水分神	・川水の神
天之久比奢母智神(あめのくひざもち)	天久土奢母持神	・雨水を入れる容器の神
国之久比奢母智神(くにのくひざもち)	国久土奢母持神	・川水を入れる容器の神

(3)イザナギとイザナミから生まれた四柱の神——自然災害への備え

『古事記』	『先代旧事本紀』	備 考
志那都日子神(しなつひこ)	級長津彦命	・風の神
久久能智神(くくのち)	匂々廻馳神	・木の神
大山津見神(おおやまつみ)	大山上津見神	・山の神
鹿屋野姫神(かやのひめ)	鹿屋野姫神	・野の神

(4)大山津見神(山の神)と鹿屋野姫神(野の神)から生まれた八柱の神——集落の防衛

『古事記』	『先代旧事本紀』	備考
天之狭土神(あまのさづち)	天狭土神	・坂道を守る神
国之狭土神(くにのさづち)	国狭土神	・坂道を守る神
天之狭霧神(あめのさぎり)	天狭霧神	・峠を守る神
国之狭霧神(くにのさぎり)	国狭霧神	・峠を守る神
天之閻戸神(あめのくらと)	天閻戸神	・谷口を守る神
国之閻戸神(くにのくらと)	国閻戸神	・谷口を守る神
大戸惑子神(おおとまどいこ)	大戸或子神	・山の斜面を守る神
大戸惑女神(おおとまどいひめ)	大戸或女神	・山の斜面を守る神

(5)イザナギとイザナミから生まれた二神——船舶の管理と食糧の確保

『古事記』	『先代旧事本紀』	備考
鳥岩楠船神(とりのいわくすふね) またの名は天鳥船(あめのとりふね)	鳥の石楠船 またの名は天鳥船	・鳥のように速く石のように堅い 楠の船を守る神
大宜都比売神(おおげつひめ)	大宜都比女神	・食物を守る神
火之迦具土神(ほのかぐつち)	軻遇突智	・火を守る神

(6) 火之夜芸速男神(火之迦具土神)から生まれた神

『古事記』	『先代旧事本紀』	備考
①十拳剣の先端からカグツチの血が岩石に落ちて生成された神々		
石折神(いわさく)	岩裂根裂神	岩を割る神
根折神(ねさく)		木の根を掘る神
石筒之男神(いわつつのお)		石の神
②十拳剣の根本からカグツチの血が岩石に落ちて生成された神々		
甕速日神(みかはやひ)	甕速日神	雷の神
樋速日神(ひはやひ)	樋速日神	雷の神
建御雷之男神(たけみかづち) 別名は建布都神(たけふつ) 別名は豊布都神(とよふつ)	雷神	雷の神
③十拳剣の柄からカグツチの血よって生成された神々		
闇淤加美神(くらおかみ)	闇籠	水源の神
闇御津羽神(くらみつは)	闇罔象	水源の神
④カグツチの死体から生まれた神々		
頭から・正鹿山津見神(まさかやまつみ)	正麓山津見神	山の神

胸から・淤藤山津見神(おどやまつみ)	背藤山津見神	山の神
腹から・奥山津見神(おくやまつみ)	奥山津見神	山の神
性器から・闇山津見神(くらやまつみ)	闇山津見神	山の神
左手から・志芸山津見神(しぎやまつみ)	志芸山津見神	山の神
右手から・羽山津見神(はやまつみ)	羽山津見神	山の神
左足から・原山津見神(はらやまつみ)	原山津見神	山の神
右足から・戸山津見神(とやまつみ)	戸山津見神	山の神

(7)イザナミの嘔吐・糞・尿から生まれた神

『古事記』	『先代旧事本紀』	備 考
① 嘔吐物から生まれた鉾山・製鉄の神々		
金山毘古神 (かなやまびこ)	金山彦神	鉾山の神
金山毘売神 (かなやまびめ)	金山姫神	鉾山の神
② 糞から生まれた土の神		
波邇夜須毘古神 (はにやすびこ)	埴安彦	土の神
波邇夜須毘売神 (はにやすびめ)	埴安姫	土の神
③ 尿から生まれた神		
弥都波能売神(みつはめ) 別名・罔象女神(みつはめ)	罔象女神	水の神
和久産巢日神(わくむすび)	稚産霊神	食物の神
(子)豊受気毘売神	(子)豊受気比女神	穀物の神

いかがであろうか。

まるで山村や漁村の村人たちの所掌事務一覧のようではないか。

血や頭・胸・性器や嘔吐・糞・尿、嘔吐物・糞・尿などから生まれたことなど、気にする必要はない。文字のない時代の暗記術の名残である。

分野ごとの責任者あるいは頭(かしら)が神(カミ)と呼ばれ、その神の指示に従い、村人たちはその能力に応じて、山や道路を管理し、水源を守り、住居を建築し、土器や武器を製造し、水や食物を確保し、機織りを行うなど、生活に必要な作業を行ない自給自足している情景が見えてくる。

すなわち、イザナギとイザナミの神生み神話と呼ばれるものは、出雲などにおける古代の村々の運営体制を細かく紹介しているものではないのか。

「神は人である」——とする新井白石流の、いわば無神論的地上説を突き詰めてゆけば、このような結論に到達する。

古代日本人の領土意識

そしてまた、「神生み神話」の前段として述べられるイザナギとイザナミの「国生み神話」というものについても、『古事記』編纂当時の奈良時代における領土意識に基づくものか、あるいは2～3世紀ごろの弥生時代・邪馬台国時代の領土意識に基づくものかは不明ではあるものの、いずれにしても、古代日本人の領土意識を明らかにしたもののなのであろう。

『古事記』によれば、大八洲(おおやしま)は、淡道之穂之狭別島(淡路島)・伊予之二名島(四国)・隠伎之三子島(隠岐の島)・筑紫島(九州)・伊岐島(壱岐)・津島(対馬)・佐度島(佐渡島)・大倭豊秋津島(本州)である。

『魏志倭人伝』には壱岐・対馬も倭国の領域として記されており、いわば神世の時代から日本固有の領土であったことは明らかである。

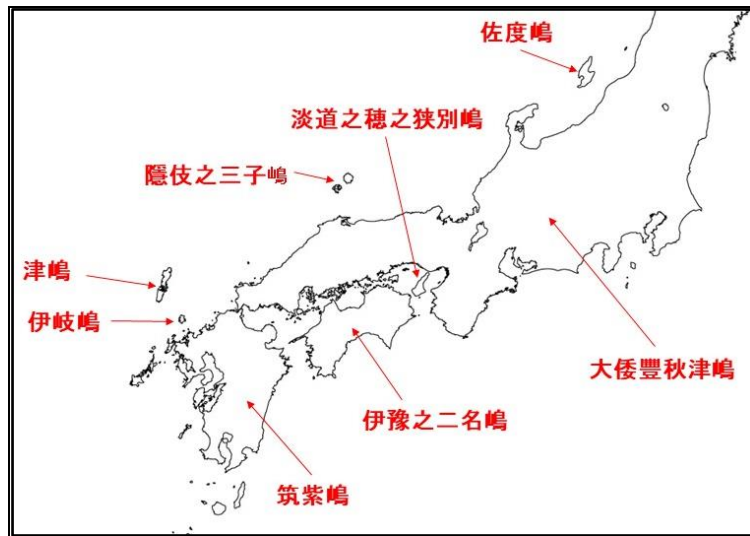
その他の六島は、吉備児島(児島)・小豆島(小豆島)・大島(周防大島)・女島(姫島)・知訶島(五島列島)・両児島(男女群島)である。

- ① 北海道・沖縄が欠けている。
- ② 伊豆諸島が欠けている。
- ③ 鹿児島島の奄美大島・屋久島・種子島・徳之島などが欠けている。
- ④ 鹿児島の大隅・薩摩が欠けている。
- ⑤ 玄界灘の島々が欠けている。

などの特徴があるが、その後の歴史的経緯をみれば、きわめて正確な地理情報に基づく領土認識と評価することができよう。

○『古事記』の大八洲(おおやしま)

区分	古事記	現在地
大八島	淡道之穂之狭別島	淡路島
	伊予之二名島	四国
	隠伎之三子島	隠岐の島
	筑紫島	九州
	伊岐島	壱岐
	津島	対馬
	佐度島	佐渡島
	大倭豊秋津島	本州
その他の六島	吉備児島	児島
	小豆島	小豆島
	大島	周防大島
	女島	姫島
	知訶島	五島列島
	両児島	男女群島



このようにイザナギ・イザナミの「国づくり神話」は、天上界の話でもなく、虚構の世界の話でもなく、まさにこの地上の話である。

しかしながら、「神生み神話」については、「神」を「God」と訳して、天上界の神話、あるいは虚構のおとぎ話として内外に発信する動きは、今後とも、おそらく未来永劫絶えることなくつづけられるであろう。

その流れにあえて逆らって、地上の話として論じたことに、とりあえず自己満足して、出雲に向かったスサノオと五十猛命を追跡することとしたい。

出雲の神門水海(かんだのみずうみ)

スサノオと五十猛命らは、九州を出発して海路出雲へ向かった。

先に、油谷湾→見島→浜田という海路をたどって出雲に向かったのではないかと述べたが、天候や風の具合などをみて、陸地に避難したりしながら進んでいったにちがいない。

浜田から出雲に向かって 45 キロほどの距離に五十猛村(島根県大田市五十猛町)があり、五十猛命がこの地に上陸したという伝説が残されている。

なお、五十猛という地名は神亀三年(726)の好字二字令により、「磯竹(いそたけ)」に変えられたが、現在では五十猛に復活している。

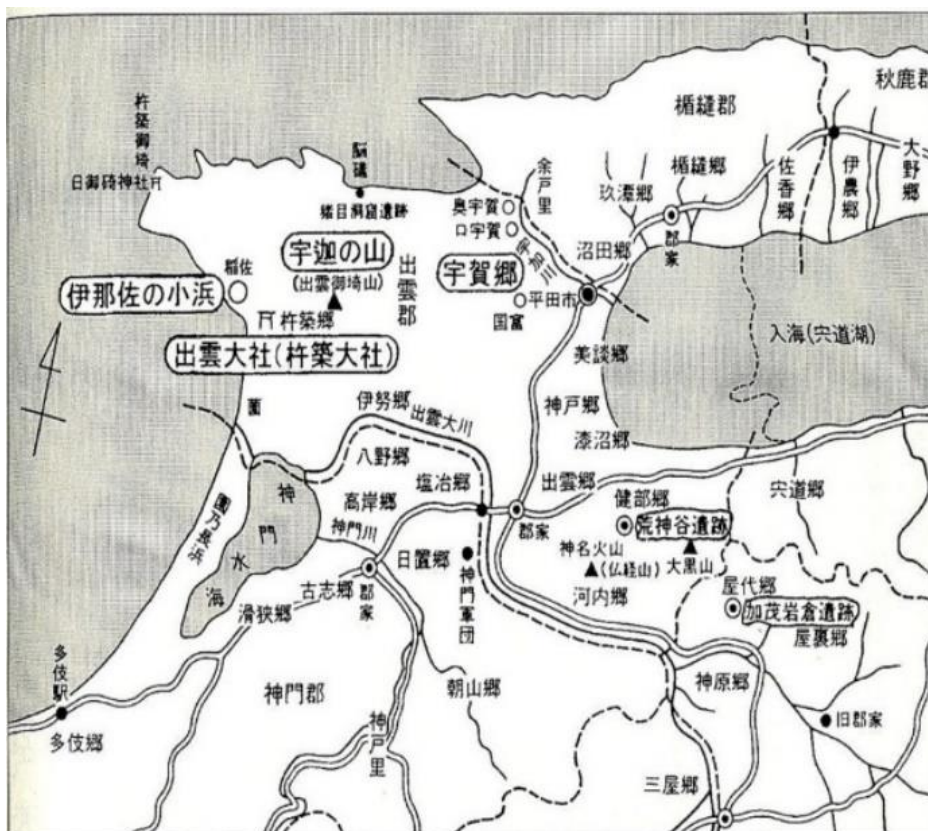


このように、宗像あたりを出発し、油谷湾→見島→浜田および五十猛村を經由して、出雲の西岸に到着したであろう。

『出雲国風土記』には、「神門水海(かむどのみずうみ)」という海とつながった湖——汽水湖のことが記されている。

「郡家の正西四里五十歩。周り三十五里七十四歩。裏には、鰯魚(なよし・ボラ)、鎮仁(ちに・クロダイ)、須受枳(すずき)、鮒(ふな)、玄蠣(かき)あり」

周囲およそ18キロの大きな湖で、魚やカキなど獲れたと記されているが、江戸時代の始めごろには湖は縮小して湿地となり、やがて消失した。



地図25 宇迦の山、伊那佐の小浜、出雲大社の位置

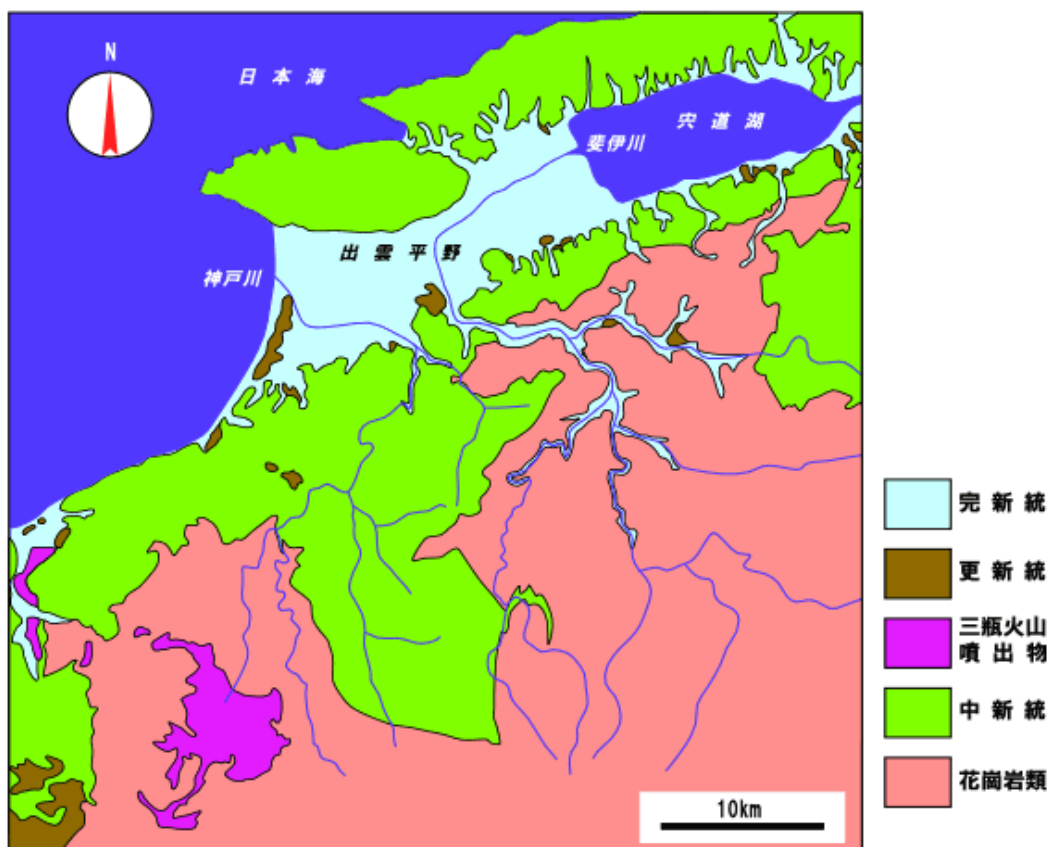


弥生時代の斐伊川

スサノオが到着した 248 年——3 世紀半ばの弥生時代末期ごろの神門水海は、いまだ深い入江——水門(みなと)の地形を維持しており、そこに斐伊川と神戸川という大きな川が流れ込んでいた。

斐伊川は、その源を島根県仁多郡奥出雲町の船通山(1,143m)を源とする一級河川で、江戸時代の始めごろの洪水によって宍道湖に流れ込んだため、若狭土手などを築造してその流れを固定し、補強工事を繰り返して現在に至っている。

神戸川も、飯石郡飯南町の女亀山(めんがめやま・830m)を源とする一級河川で、出雲市を貫流した後、現在では消失した神門水海の北岸あたりから、直接日本海に流れ込んでいる。



オオゲツヒメ

『古事記』には、スサノオが高天原を追放された次の段に、奇妙な逸話が挿入されている。

スサノオが、大気都比売(オオゲツヒメ)に食物を乞うたところ、

「ここに大気都比売、鼻口また尻より、種々の味物(ためつもの・食物)を取り出でて、種々作り具(そな)えて進(たてまつ)るときに、スサノオの命、その態(しわざ)を立ち伺いて、濊汚(きたなく)して奉るとおもほして、その大気都比売の神を殺したまひき。かれ殺さえまし神の身に生(な)れる物は、頭に蚕生(なり)、二つの目に稲種生(なり)、二つの耳に栗生(なり)、鼻に小豆生(なり)、陰(ほど)に麦生(なり)、尻に大豆生(なり)き。かれここに神産巢日(カミムスビ)御祖(みおや)の命、こを取らしめて、種と成(な)したまひき」

というのである。

スサノオはオオゲツヒメに食べ物を乞うが、その鼻や口や尻から食べ物を出すのを見て怒って殺した。すると、オオゲツヒメの頭・目・耳・鼻・陰(ほと)・尻から蚕や五穀の種が生じたとする。

五穀について、『古事記』は、稲・麦・粟(あわ)・大豆(だいず)・小豆(あずき)と記しているが、『日本書紀』は稲・麦・粟・稗(ひえ)・豆とする。

中国の五穀の概念も、時代や文献によって微妙に異なっており、『周礼』の鄭玄注は、麻・黍(きび)・稷(シヨ・粟?)・麦・豆とするが、『孟子』の趙岐注は、稲・黍・稷・麦・菽(しゆく・まめ)とする。

五穀について

	稲	麦	粟(稷)	豆(菽)		稗(ひえ)	麻	黍(きび)
				大豆	小豆			
古事記	○	○	○	○	○			
日本書紀	○	○	○	○		○		
周礼・注		○	○	○			○	○
孟子・注	○	○	○	○				○

スサノオに殺されたオオゲツヒメは、イザナギとイザナミの神生み神話のなかで、食物を守る神として登場する。

地上説で解釈すれば、食糧管理係ということになるろう。

出雲に着いたスサノオたちは、手始めに食糧を備蓄している倉を襲い、その逸話が神話形式で記憶され、伝えられたのが『古事記』の記事なのかもしれない。

高天原(筑紫)の最高権力者となったタカミムスビの兄弟と思しきカミムスビも、かつてはしばしば出雲に出入りしていたのか、『古事記』には、カミムスビの妻らしき女性も登場し、五穀の種をもらっている。

斐伊川を上る

スサノオと五十猛らは、斐伊川の上流に向かった。

『古事記』は、

「かれ避追(やは)えてくかくて追放されて>、出雲の国の肥の河上、名は鳥髪といふ地(ところ)に降(あも)りましき」

と記し、『日本書紀』も、

「素戔鳴尊(スサノオ)、天より出雲国の籬(ひ)の川上に降到(いた)ります」

と書く。

肥の河(古事記)＝籬(ひ)の川(日本書紀)＝斐伊川のことである。

天降った山は、鳥髪(古事記)＝鳥上(日本書紀)＝船通山である。

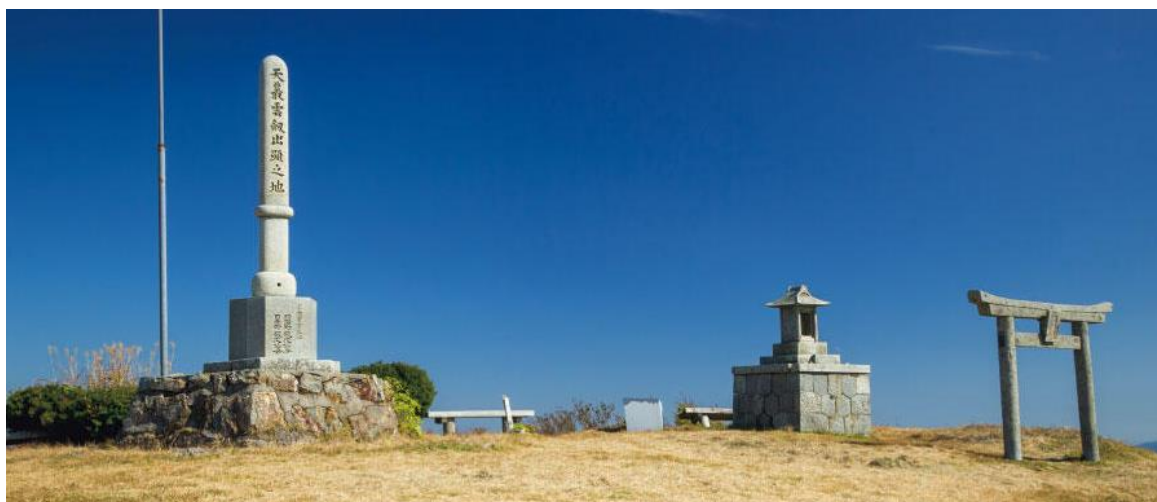
『出雲国風土記』は、斐伊川下流を出雲大川と呼び、出雲郡の条には、

「出雲の大川。源は伯耆と出雲と二つの国の堺なる鳥上山より流れ、仁多郡の横田村に出・・」

と記されている。

船通山(1,142m)は、島根県仁多郡奥出雲町と鳥取県日野郡日南町の県境に位置し、比婆道後帝釈国定公園内にある。

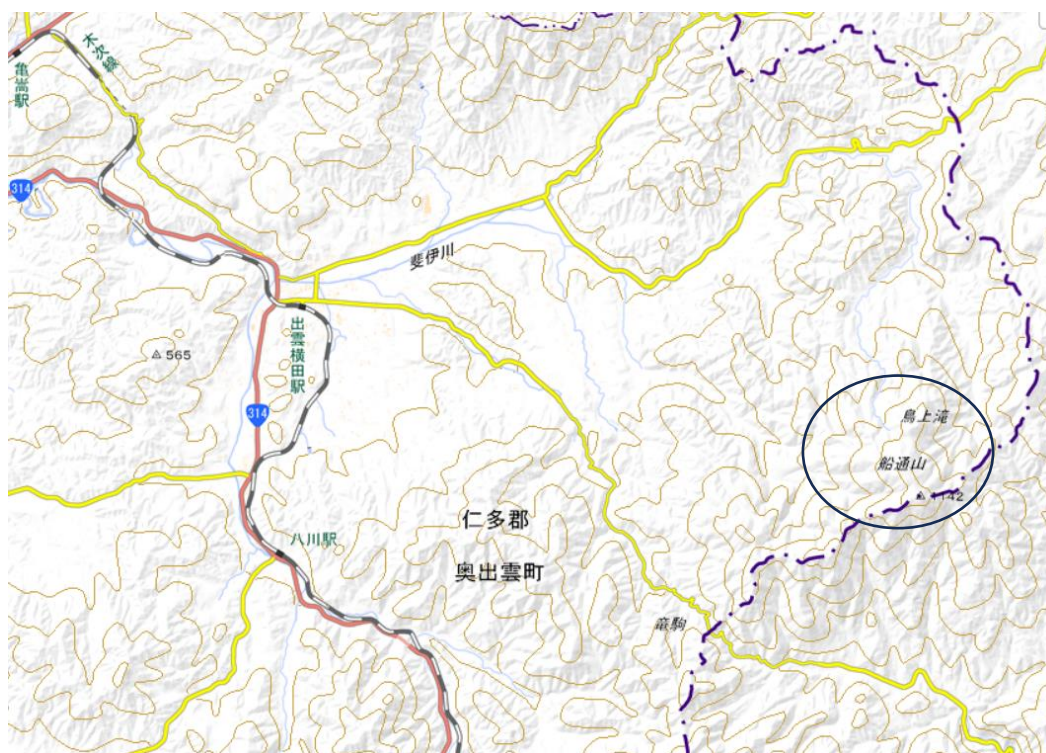
6 合目あたりに「鳥上の滝」があり、ヤマタノオロチのすみかとも伝わる。高さ約 10 メートル、幅約 5 メートルの滝で、斐伊川の源流といわれ、島根名水 100 選に選ばれている。



船通山山頂の「天叢雲劍(草薙劍)」の記念碑



鳥上の滝



以上、『古事記』『日本書紀』と地元の伝承等に基づいて、【九州→日本海→斐伊川→船通山】というスサノオと五十猛らの出雲入りの経路について述べたが、『日本書紀』第二の一書と第三の一書に、それとは異なる経路が掲載されている。

安芸(あき)国の可愛(え)の川上

まず、『日本書紀』神代篇の第二の一書には、

「是の時に、素戔鳴尊(スサノオ)、安芸(あき)国の可愛(え)の川上に下り到ります」

と、安芸国——すなわち、広島県側の「可愛(え)の川」の上流に天降ったとされているのである。

「可愛(え)の川」は江の川(ごうのかわ)という。古くは「エノカハ」と呼ばれたという(『日本書紀(一)』岩波書店・神代上第八段注一七)。

江の川は、広島県山県郡北広島町の阿佐山(1,217m)を源に、安芸高田市・三次市から県境を越えて島根県邑智郡邑南町・美郷町・川本町を流れ、最終的に江津市から日本海に流れ込む中国地方最大の一級河川である。中国太郎とも呼ばれる。

以前は、島根県側では「江川(ごうかわ)」、広島県側では「郷川(ごうかわ)」と書かれ、また、三次市より上流では、『日本書紀』どおり「可愛川(えのかわ)」と呼ばれたという。

おそらく、「エノカハ」の「エ」に、「可愛(え)」と「江(え)」という漢字を充てたが、やがて「江(え)」を音で「こう」と読むようになり、さらには発音がよく似た「郷(ごう)」という漢字を充てる者まで現われたということなのであろう。

しかしながら、瀬戸内海側と日本海側を結ぶ唯一の大きな川ということから、人々の交流の媒体

としての役割を果たしたことはまちがいない。

矢谷墳丘墓

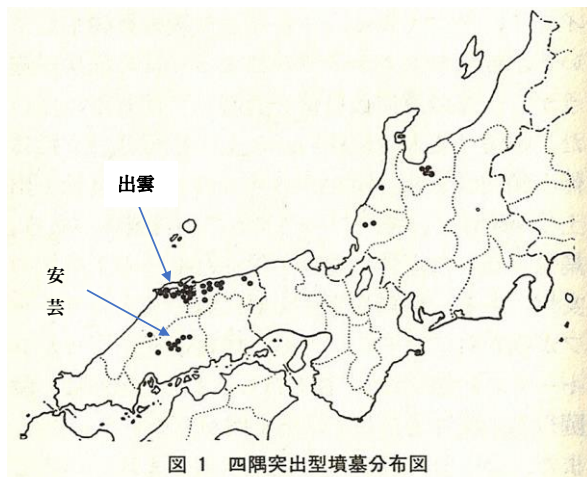
矢谷墳丘墓(広島県三次市東酒屋町字松ヶ迫)は、出雲地方の影響を大きく受けた四隅突出型墳丘墓であり、吉備式の特殊器台・特殊壺が出土している。



驚くべきことに、周溝墓から出土したガラス小玉にはナトロン(蒸発塩)が含まれ、古代ローマ帝国産ともいわれる。

弥生時代終末期から古墳時代初頭頃の築造とみられているから、後期邪馬台国時代とも重なる可能性を有している。

いずれにしても、出雲・吉備・九州・大陸との交流を物語る遺跡といえよう。





矢谷墳丘墓出土の特殊器台・特殊壺

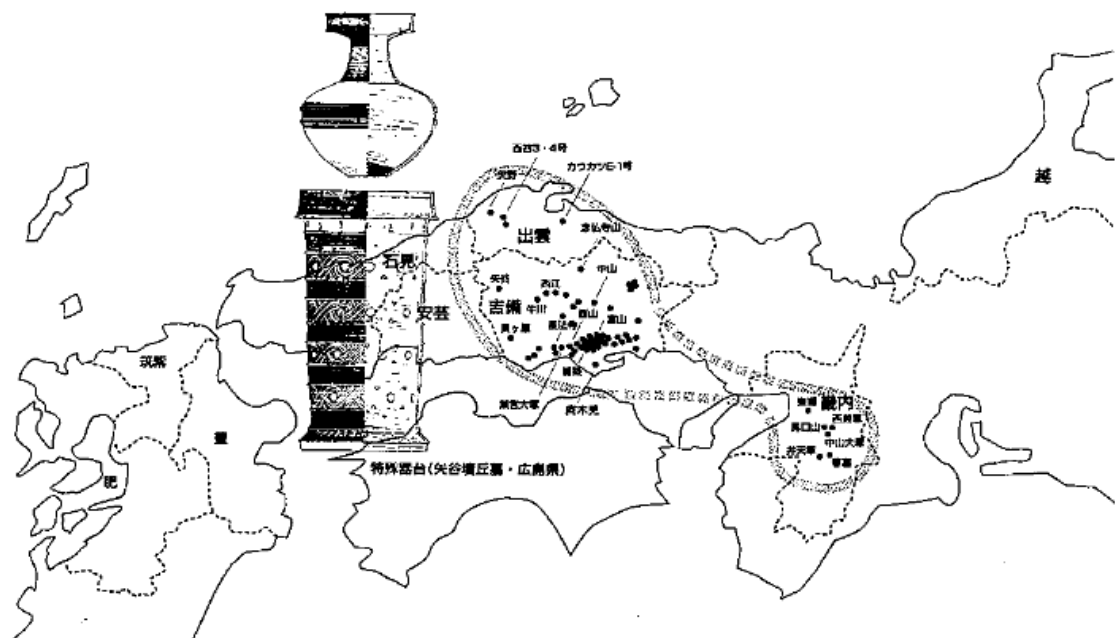


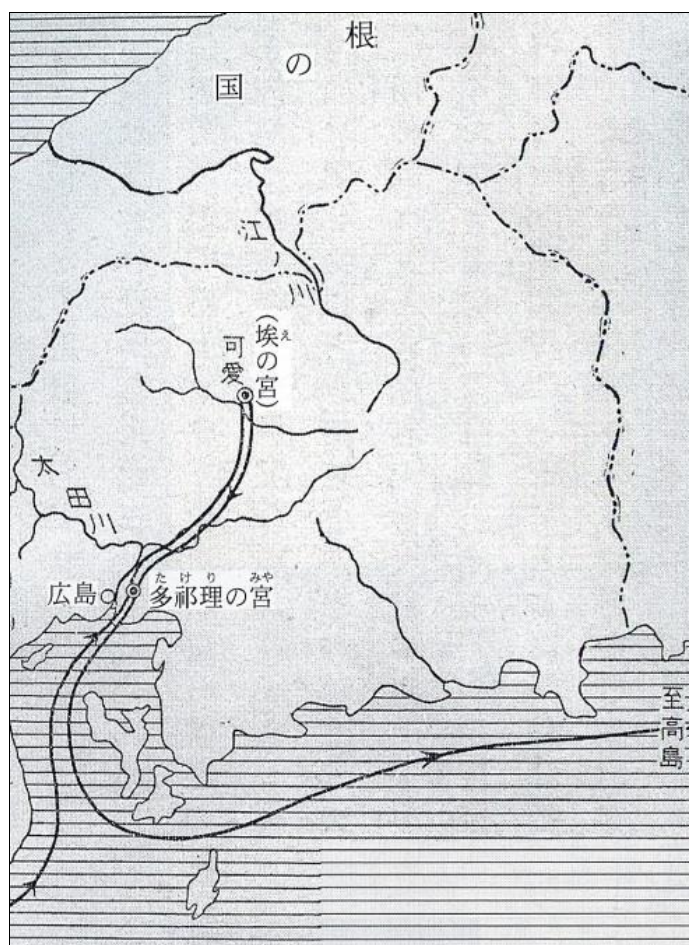
図17 特殊器台と壺の変化（上）と分布（下）（広島県立歴史民俗資料館1995）

出雲の遺跡についてはずっと先で述べる予定であるが、『日本書紀』神代紀の第二の一書に書かれているとおり、スサノオが瀬戸内海方面から江の川——すなわち、「安芸(あき)国の可愛(え)の川」から出雲に入ることもちろん可能である。

神武天皇の「安芸国の埃宮(えのみや)」

なお、神武天皇が東遷した際に滞在したとされる「安芸国の埃宮(えのみや)」(『日本書紀』)についても、いうまでもなく、可愛(え)の川——江の川と関連がある。

このことについても、ずっと先の——神武東遷のくだりで詳しく述べることにしたい。



いずれにしろ、『古事記』および『日本書紀』本文に従えば、スサノオらは日本海コースで斐伊川下流から上流に向かうコースを採用しているが、何ゆえ安芸(広島)側から出雲に入ったような異伝が残ったのか。

スサノオが出雲の大王になったのち、その治世の間に、吉備・安芸など瀬戸内海地域を頻繁に訪れた記憶と混同されたのではないか。

四隅突出型墳丘墓や特殊器台等の分布などからみても、出雲と吉備との活発な人的・物的な交流があったことが確認できるからである。



江の川

吉備と出雲の簸(ひ)の川上の山

さらには、『日本書紀』神代紀第三の一書である。

「この劍(草薙劍)は昔素戔嗚(スサノオ)の許にあり。今は尾張国にあり。そのスサノオの蛇を断(き)りたる劍は、今吉備の神部(かむとものお)の許にあり。出雲の簸(ひ)の川上の山是(これ)なり」

と、スサノオがヤマタノオロチを斬った十拳劍【蛇之籠正(おろちのあらまさ)・蛇韓鋤之劍(おろちのからさびのつるぎ)】が吉備の神部(かむとものお・神主)の——石上布都魂神社(岡山県赤磐市石上)に保管されていることに触れられている。

そして、その地が「出雲の簸(ひ)の川上の山」というのである。

しかしながら、吉備の石上布都魂神社は、船通山から東南 80 キロの遠隔地にある神社である。

十拳劍でヤマタノオロチを退治したという出雲の伝承と、その十拳劍が石上布都魂神社に伝来したという吉備の伝承が混同されたのであろう。

熊成峯(くまなりのたけ)

なお、『日本書紀』第五の一書には、「韓郷の嶋(からくにのしま)」に渡ったスサノオと五十猛命は、その後帰国し、五十猛命と姉妹の大屋津姫命、爪津姫命が各地で植林して、紀伊の国に向かったが、スサノオは「熊成峯(くまなりのたけ)」から、その後根国(ねのくに)——出雲に入ったとされている。

この「熊成峯」については、その名称以外、具体的に特定できるだけの情報が欠落しており、何を述べても主観的にならざるを得ないため、これ以上の言及は差し控えることしたい。

以上述べたこと的前提となる『日本書紀』の各一書と『古事記』の記事について、一覧表を作成したので、参考にされたい。

スサノオの行程

区 分	新羅	安芸の可愛の川上	簸の川上	ヤマタノオロチ	クシナダヒメ
日 本 書 記	本文		○(鳥上)	○	○
	第一の一書		○	×	○
	第二の一書		○(江の川)	×	○
	第三の一書		吉備	○	○
	第四の一書	○(ソシモリ)			
	第五の一書	○(韓郷の嶋)		熊成峯	
古事記			肥の川上 鳥髪	○	○

(以下、つづく)